

●優秀賞

「子ども先生型授業」の開発 —地域教材で学び合う姿を求めて—

千葉県安房郡富浦町立富浦小学校 ^{かつら こういち} 桂 幸一

1 研究の動機と対象

(1) 研究の動機

これまでの小学校6年の歴史学習は、教科書や社会科資料集を中心に、中央からみた授業を行ってきた。また、「調べる段階」は子どもたち一人一人が、文献から情報を集め、その情報を知識としてまとめる段階であり、「深める段階」は、その情報を互いに発表し、交換し合い、それをまとめて学習問題を解決していくという手法が多くとられていた。

そのため、人物の生きざまに焦点をあてた教材でも、実感を持って取り組むことが少なかった。また、「調べる段階」「深める段階」での子どもどうしの学び合いの機会が希薄で、「深める段階」は発表会の形になりがちであり、意見が絡み合う場面が少なかった。そこで、下記の教材を開発し、二つの仮説を設けて実践した。

なお、「子ども先生型授業」とは、子どもたちが調べたことを発表する時、情報の一方的な伝達ではなく、学習者に対して思考や認識が生まれるようにするため、資料提示、発問、切り返し、まとめといった授業の組み立てを、子どもたちが自ら考えて実践する授業のことである。

(2) 研究の対象

① 教材名 社会科「里見氏の興亡と天下統一」

里見氏は戦国時代から江戸時代初期まで、約180年10代にわたり、安房地方で栄えた戦

国大名である。学校のすぐ目の前には、里見氏が居城とした岡本城跡があり、春の遠足では、同じく居城としていた館山城跡公園に行っている。

② 対象学年

6学年（男子12名、女子16名、計28名）

2 研究の仮説とそれに迫る手立て

(1) 研究の仮説

【仮説1】 課題選択グループ調べをもとにして、単元の一部を子ども先生型授業で行えば、子どもたちが主体的に活動し、お互いに学び合い、成就感を味わうことができる授業になるだろう。

【仮説2】 地方史から中央を見て教材化すれば、歴史を身近に感じながら、時代の移り変わりを認識するだろう。

(2) 仮説に迫る手立て

① 仮説1に対して

- ・「調べる段階」をグループ学習で行う。課題は自分で選択し、同じ課題を持つ者どうしでグループを形成し、調べ学習を行う。
→課題選択グループ学習
- ・教師がT Tで行い、グループを分担支援する。子ども先生型授業を意識した資料作りや情報提供の支援を行う。
- ・「深める段階」を子ども先生型授業で行う。授業を進行していくグループへの支援をT 1，学習者をT 2が支援する。
- ・学習後のワークシートの記入で評価し、支

援する。

② 仮説2に対して

- ・戦国大名里見氏の願い（領地安堵・鎌倉公方再興）が表れる事象で学習を進める。
- ・地方史では見られない中央の動き（織田信長全般、豊臣秀吉の農民支配）に対しては、一人調べによる学習と、中央の動きをさらに詳しく調べるグループを作るように助言する。
- ・総合学習を展望しながら、夏休みの自由研究への広がりを図る。

3 実践の計画

(1) 児童の実態

① 子ども先生型授業を増やした

前年度から、国語科、社会科の一部の単元について、子どもが進行して授業を行う機会を設けている。単元のねらいから外れてしまい、失敗することがたくさんあった。しかし、子どもたち一人一人の目は真剣であり、意欲は普通の授業より強かった。今年度は「何を学習し」「どう考えてもらうか」を重点に行ってきた。子どもが先生になって行われる授業が、少しずつ形になってきている。

② ふるさと富浦町の現状認識の育成を図った

前年度、7月から夏休みを含んで9月まで、ふるさと富浦町の環境学習を行った。ふるさとの自然環境である大房岬、水田、岡本川、山、海浜の五つの場所の環境問題を追求し、善後策を考えて実践し、将来のふるさとの野山に寄せる思いを地域の人に提言した。この学習を通して、ふるさとの現状認識が高まり、ふるさと意識を高めることができた。

③ 調べ活動を意欲的に行った

子どもたちは先年の環境学習により、さらに体験的な調査活動を好むようになった。また、どこで、どのようにすればめざす情報が得られ、解決できるかを予想し、解決のための活動を行えるようになった。

④ 歴史学習では一人調べをもとに、それを発表した

中央の人物中心の学習であるため、主に社会科資料集や図書館・図書室の本などを用いて一人調べを行い、それをもとにして、授業では発表し合いながら深めていくという方法で学習を進めていた。

(2) 授業の特性

① 子ども先生型授業について

単元の一部を子ども先生型授業で行うということは、子どもどうしによる学び合いの方法が変わることであり、能動的に学習に参加し、より成就感を味わうことができる。しかし、子ども先生型授業には、教師の意図から外れてしまう場面が予想される。教材のねらいから外れないかぎり、教師の意図から離れて授業が進行してもよしとする。子どもたちが自分たちで軌道修正しながら、学習を進めることも必要である。子どもたちが自分の目で見たり聞いたりする中で、教材の中から教師とは違う価値を見つけだし、学習していくほうが、より能動的な学習スタイルであると考ええる。

② 地方史からみる歴史について

戦国期から江戸幕府成立にかけての中央集権化への歴史過程を、戦国大名里見氏を通して学習することによって、歴史上の人物の人物となり、より身近に感じながら、歴史学習を行える。中央集権の支配確立期に、この安房の地に生きた里見氏を通して、統一された視点で、天下統一の過程や秀吉・家康の業績をとらえることが可能である。また、調査活動もフィールドワークなど体験的調査活動が可能であり、実感を持って歴史学習に取り組むことができる。子どもたちの生活圏には、岡本城跡、館山城跡など里見氏の残した足跡がたくさん存在する。地域の歴史を学習することは、さらに地域を見つめる目に厚みを増すものと考ええる。つまり、歴史的な流れの中

で、今の自分たちの生活環境が成り立っているという認識を持つことができる。

(3) 教材の目標

① 興味・関心

- ・里見氏の領国支配の様子を進んで調べようとする。
- ・夏の自由研究のめあてを持つことができる。

② 思考・判断

- ・里見氏にとって秀吉、家康とはどんな存在だったのかを考えることができる。
- ・里見氏に対して「思い」を持つことができる。

③ 観察・資料活用・表現

- ・八つの居城、北条氏との戦い、岡本城、鶴谷八幡宮、小田原征伐、改易という事象から、里見氏の願いを調べることができる。
- ・調べたことを分かりやすい表現でまとめ、子ども先生型授業に活用することができる。

④ 知識・理解

- ・里見氏は、領国安堵と鎌倉公方再興の願いのもとに、北条氏と戦ったことを理解できる。
- ・里見氏は、秀吉・家康によって中央主権的支配下に組み込まれ、滅んでいったことを理解できる。

(4) 指導計画

16時間扱い（Fグループの授業13/16）

① つかむ・予想する段階（2時間）

- ・学習問題を作る。
- ・学習計画を立てる。
→六つのグループ編成

② 調べる段階（3時間）

- ・計画に従い、グループごとに調べる。

③ 深める段階（9時間）

- ・調べたことをもとにして、各グループによる子ども先生型授業を行う。
- ・里見氏の願いをまとめる。

④ まとめる段階（1時間）

- ・学習問題に対して自分の考えをまとめる。

⑤ 広げる段階（1時間）

- ・夏休みの自由研究のテーマを持つ。

4 実践の概要

(1) つかむ・予想する段階

子どもたちは春の遠足で館山城跡公園にでかけた経験を思い出し、学校の前にある岡本城跡をフィールドワークして、里見氏の概要説明を聞いた。この結果、「里見氏とはどういう戦国大名だったのだろう。」という疑問が生まれた。この疑問をもとに「調べてみたいこと」を発表したところ、六つの課題ができた。さらに「里見氏はどんな願いを持って、戦乱の世を生きぬいたのだろうか。」という学習問題が生まれた。

その後、六つの課題から一つを選択し、同じ課題を持つ者どうしてグループを作り、計画を立て、調べていき、調べたグループが中心になって、その課題についての授業を進めていくという学習計画ができた。教師は3グループずつ担当し、グループとグループとのパイプ役となり、調べる内容が重複しないようにした。

六つの課題は次のとおりである。

A：なぜ八つの城を持っていたのか。

B：敵（北条氏）とはどのように戦っていたのか。

C：岡本城の様子はどのようなだったのか。

D：鶴谷八幡宮はなぜ作られたのか。

E：信長・秀吉・家康はどのように天下を統一したのか。

F：信長・秀吉・家康と関係はあったのだろうか。

(2) 調べる段階（課題選択グループ調べ）

子どもたちが資料作りに使用した文献、訪問先、作った資料は次のとおりである。

① 文献

『里見氏年表』『富浦町史』『千葉県航空写

真』『南総里見太平記』『高校日本史資料集』『岡本城発掘調査報告書』『戦国大名里見氏』『長篠合戦図』『関ヶ原合戦図』

② 訪問先（フィールドワーク）

富浦町公民館、岡本城跡（富浦町）、館山市立図書館、館山市立博物館、鶴谷八幡宮（館山市）、元八幡宮（三芳村）、宝珠院（三芳村・資料1）

③ 作った資料

里見氏系図、八つの城の居城図、里見氏勢力範囲図、小田原征伐陣地図、昔の岡本城の様子、里見家臣団の表、鎌倉公方系図、鶴ヶ丘八幡宮修理のための北条氏からの手紙、里見義康小田原参陣経路図、里見氏関ヶ原参陣図、里見氏改易までの表など。

これらの調べた結果をまとめる段階で、「これをもとに自分たちが授業するにはどう

したらよいのか。」を考えた。「何がいちばん伝えたいのか。」「どう投げかければたくさん意見が出るのか。」「こんな質問が出たら、どうするの。」など、教師が授業を進行する機能を子どもに託した。子どもたちは自分の調べたことで授業ができる期待と不安で、授業をイメージしていった。

(3) 深める段階（子ども先生型による一斉授業）

授業を進行していくグループにはT1が、学習者にはT2が支援するという形で、子ども先生型授業が進められた（資料2）。各グループの発表から、最終的には一人一人の子どもたちが、里見氏の願いとそれに対する自分の考えを持てるように支援していった。

「Fグループによる授業記録」を資料3に示す。

授業記録の「Fグループの活動」に下線で示した発言は、Fグループの子どもが友達の発言を上手に生かして、学習の流れを作った場面である。一方で、「教師の支援」に下線で示したように、教師が出なければならぬ場面もある。T1は子どもが自分たちでは軌道修正ができないという場面に、助言していくように心がけた。T2は学習者の間に入り、補足説明などの支援を行った。

(4) まとめる段階

深める段階の子ども先生型授業により、各グループから学んだ里見氏の願いは、「領国を広げたい。」「北条氏から領国を守りたい。」「岡本城は、安房を支配するには良い所だ。」「鎌倉公方を再興させたい。」「秀吉・家康は大きな存在だ。」という内容だった。

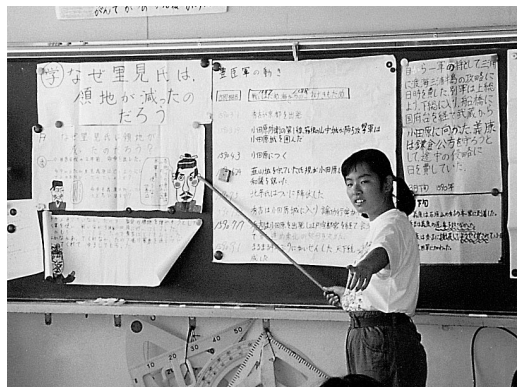
この段階ではそんな願いを持って生きてきた里見氏について、自分の考えをまとめ、発表していった（資料4）。主な内容は次のとおりである。

・鎌倉公方再興の願いを初代から9代まで持

資料1 宝珠院を訪問



資料2 子どもが授業を進める



資料3 Fグループによる授業記録

Fグループの活動	学習者の反応	教師の支援
○学習課題の提示 <なぜ里見氏の領地がこんなに減ったのでしょうか。> ○小田原征伐と里見氏 ・小田原征伐に関係がありそうですね。昨日Aさんが説明してくれた小田原征伐ってどういうことでしたか。 ・秀吉は1590年4月に小田原に着きました。ところで、里見氏はどうしたと思いますか。 ・小田原征伐に、参加しました。みなさんでこの資料を読んでください。 ・里見は間に合いましたか。 ・どうして遅刻したと思いますか。 ・よく分かりません。富浦町史にそう書いてあります。 ・逆に質問です。<u>里見氏は何のために戦ったのですか。</u> ・北条氏の領地を侵略して自分の領地にしようとしたと考えられます。 ○学習課題のまとめ ・秀吉が怒った理由は？ ・もう一つあります。年表を見てください。1587年には戦争禁止令、1588年には海賊禁止令が出ています。 ・秀吉はもともと関東を家康に与えるつもり。だから理由をつけて南上総を家康に与え、里見氏は安房一国だけになってしまった。 ・その時の里見義康の気持ちを各自で書いてください。 ・次は家康との関係です。	N 北条氏は籠城戦で対抗したけれど負けた。 B 「小田原評定」が始まった。 S 北条氏も関東の武士に動員令を出した。 I 動員令って何ですか。 S 戦いにかりだす命令みたいなものです。 J 他の所で戦っていたと思う。 S 北条氏は敵だから一緒に戦った。 R 敵だし、隣の領地だから戦った。 J 意見が変わりました。小田原で戦ったと思います。 (全員で読む。) 「秀吉は4月に小田原に着いた。しかし、里見義康は鎌倉公方再興の願いのもと、途中の侵略に日を費やしていた。」 全員 遅刻。 Y 船にエンジンがついてないから。 M 海で敵と出会ったから。 S 風が吹かなくて船が進めない。 M 1か月以上も風が吹かないのはおかしい。 (全員で資料を読み直す。) K 途中の侵略に日を費やした。 A 戦っていたから遅くなった。 N 質問。どこを侵略していったのですか。 I 自分の領地を守るため。 Y 鎌倉公方を再興させるため。 N 天下を統一するため。 全員 違います。 全員 遅刻したから。 Y だから「途中の侵略」は秀吉の命令を無視したことになる。 K 戦いながら遅れたからだ。 N 命令違反をたくさんしてしまったんだ。 (全員、記入を始める。) H 65年間も一生懸命戦って守ってきた領地なのに、たった4か月で取られてしまくてくやしい。私だったら、あとで家康と手を組んで秀吉をたおす。 M 秀吉の一言で減らされてとてもくやしい。「秀吉は農民の出身、里見氏は源氏の血筋ということで、秀吉を甘くみていた。」と館山市立博物館の人に聞いた。自分だったら秀吉の言うことを聞いたと思う。そうすれば領地が減らずにすんだ。	・秀吉軍の動きについて説明してあげて。 ・小田原征伐に参加したかどうか、みんなに教えて。 ・資料につけたします。二手に分かれて、一方は陸路三浦半島をめざし、他方は海路で三浦半島へ行って、鎌倉で落ち合う作戦でした。 ・「義康は」の所からもう一度資料を読み直してください。 ・秀吉の戦いは何のため。 ・里見氏の考えたことと秀吉の考えたことは同じかな。 (机間巡視。発表指名者を相談。HとMを指名する。) ・Mさんの話につけたすと、「安房は中央から離れすぎでいた、つまり田舎だったので、秀吉の力のすごさを知らなかった。」ということも話してくれました。

資料4 里見氏について考えたこと

鎌倉公方を争うとかんはってきをしたのはいいけれど、秀吉の出した命令を振り払って、しつこく鎌倉公方を鎌倉にもとせはよかったですか。そうすれば上総の国をとられることもあまりなかったと思う。秀吉という人物をもっと知っていれば、里見にとって不運なことはあまりなかったと思う。

ぼくは里見氏は、領地を広げたいより、自分の領地を経済的に豊かにする方がいいと思います。それは、自分の領地を広げるばかり考えていて、その回りには、たくさん敵がいるんだから、争って死んでいくより、農民などを幸せにしてあげて、いい居場所とみとめて、金儲けはどい死に方をしようか、と。それと、その考えに気付いた義頼はすごい人だ、と、思いました。

ち続けていてすごいと思ったし、他の戦国大名と少し違っているところのようだ。

- ・領地が3倍以上もある北条氏とよく戦ったものだ。
- ・鎌倉公方再興の願いが関係して、安房近辺しか支配できなかったし、秀吉により領地が減る原因になってしまった。もう少し考えて欲しかった。
- ・秀吉という人物をもう少し知っていれば、里見氏にとって不運なことはなかったと思う。
- ・塩を売ることにより、安房地域を豊かにしようとした考えはすばらしかった。
- ・岡本城の8代義頼は、経済発展に尽くした人で、9代義康は小田原参陣、朝鮮出兵、関ヶ原と時代の出来事に参加して大変だと思った。だから31歳で死んでしまったと思う。
- ・領地を広げて豊かにすることは、そう簡単なことではないことが分かった。

(5) 広げる段階

授業だけでは解決できなかった里見氏の疑問や、さらに調べてみたいことを、夏休み自由研究で調べることにした。本教材学習後、

自らのめあてを持ってふるさとの野山に飛び出す姿は、「総合学習」の一つの姿であるとする。

自由研究の例としては、次のようなものがあった。

- ・親子で里見氏の八つの居城めぐり
- ・町内「岡本」さんについて
- ・里見氏と鉄砲の関係について
- ・安房里見氏が誕生するまで
- ・里見氏と光厳寺について
- ・里見氏滅亡について

5 成果と課題

(1) 子どもの授業感想

自分が授業をやって

私はこんな本格的な授業を自分たちがやりとげてすごいと思った。今まで自分が調べて自分が授業することはなかったから、今でも「本当にやったのか？」とうたがってしまう。

5年生の時こんなようなことをやったけど、こんなにうまくはいかなかった。

自分のぜんぜんわからなかったことを、一つや二つぐらいのヒントをもとにやっていくので、少し頭をなやませるけど、でもやっていくうちにわかるのがとっても楽しいし、おもしろい。

私は学校にこんな授業のやり方を入れたらとてもいいと思う。授業も楽しくなるし、自分の力がとても伸びると思う。

この授業をやってよかった。また自分たちで調べて、自分たちの授業を作りあげたいと思う。

里見氏から見た天下統一

里見から見た天下統一は、とても迷わくで困ったことだった。小田原征伐に戦いながら行き、遅刻したことでもとても怒られ、領地を没収されてしまった。家康の時も、大阪冬の陣で江戸が狙われるといけなからという理

由で、勝手にむほんの罪をきせられてとりつぶしになってしまった。本当に頭にきたに決まっている。

教科書では天下統一した側から見ているから、絶対よいことのようにになっているが、された側にしてみれば、迷わくなんて話ではない。天下統一のかけには、里見のようにとりつぶされていった小さな大名がたくさんあったにちがいない。表むきだけでなく、裏も大切だというのが、里見という小大名を通してわかった。里見のことについて勉強しなかったら、こんなことには気づかなかったと思う。

代義康に対して、「かわいそう」と「愚かだった」という相反する人物評価を持つことができたのは、生きざまに触れた学習ができた成果であるとする。

初めて里見氏について教材化したので、さらに素材を吟味し、人物の人柄までもにじみ出てくるような教材に仕上げたい。

(2) 仮説1について

単元の一部を子ども先生型授業で行うということは、学び合いによる成就感を高める有効な手段であるといえる。授業後の感想で、「とても緊張したが、良い経験になった。」「また違うところするのが楽しみだ。」「友達を助けたいという気持ちも生まれた。」などと記述する児童が19名いた。

自分の調べたことをもとに、他のグループの授業で発言をする子どもがたくさんいた。調べたことへのこだわりの表れであり、「里見氏の願いをまとめる」という意識のもとに授業が行われたためであるとする。

子どもと先生型授業ができるようにするためには、長期的視野にたって、子どもを育てていく必要がある。学年の発達段階に応じて、どこまで児童に任せるかを検討する必要がある。

(3) 仮説2について

地域教材のため、調べやすかった。調査活動ではフィールドワークをするなど、体験活動を取り入れることができた。そのため、里見氏がとった対処の仕方を「自分だったら」という視点で考えることができた。

里見氏の生きざまに対しての意見を持つことができた。特に天下統一の時代に生きた9